

子どもの虐待における人間の関係性

——プレイセラピーにおける「枠組み」づくりの再構築——

南部 真理子

要旨：本論文は、子どもの関係発達論の立場から人間の関係性についての研究である。研究テーマは、「子どもの虐待における人間の関係性」であり、それは、文献、臨床による研究を基盤としている。虐待問題は、現代社会における子どもの様々な問題を解く糸口となり、本来あるべき人間関係を損なうのが虐待問題であると考えられる。

本文の着目点は、子どもの虐待を人間の関係性の問題であると捉えるがゆえに、「子どもとセラピストとの関係性」を従来の「枠組み」と異なる捉え方をするとある。

本論文は、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の焦点を「子どもとセラピストとの関係性」にあわせ、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の空間、時間の「枠」のあり方について考察し、臨床事例を通して再構築された「枠組み」について論じるものである。

はじめに

臨床心理現場での虐待を受けた子どもの関わりのみとつとして、プレイセラピーがある。プレイセラピーとは、プレイを通して言葉の発達がまだ充分ではない子ども達と関係を築いていこうとするものである。セラピーでは、虐待で受けたトラウマをプレイを通して、再び体験し、解放し、そして再統合しようとしている子ども達に出会う。

大人のセラピーにおいても、広義の意味での虐待を受けながらも立派に成長し、結婚をして母親となったクライアント達と出会う。彼女たちは、自分の子どもが思春期に不登校などの一見問題と思われる行動を起こす中で、自分自身の過去の問題に気づいていく。彼女たちは、セラピーを通して、過去の問題に気づくことの大切さ、辛さ、そして意味をくり返し考えつつ、そのトラウマを解放しそして再統合していく。

臨床現場では、虐待を受けた子ども達との関わりの中で多くのことが示される。そのほとんどの子ども達にとっては、これまでの環境が子ども達の知っている唯一の環境といえるものであった。子ども自身が置かれた環境が虐待環境であったと気づくことは、想像以上の苦しみを伴う。その子ども達といわば成長の過程を共にすることで、セラピスト自身も成長する。

稲垣 (2001)¹⁾は、「子どもの発達段階は、それぞれの発達が他の発達段階にある人の発達によって支えられ、“育つ—育てられる”という関係の生命サイクル過程の中で展開される」としている。セラピストもクライアントである子どもも、まさにこのサイクル過程の中で子ども達の発達によって支えられ、育てられていると感じている。

子ども達の成長の過程を言語化することによって明らかにされるこころの動きは、子ども達自身のものである。できれば、子どもとセラピストとの関係性として、子どもとセラピストの心の中にしまっておきたい。しかし、子どもの成長への希望、回復力に畏敬の念をもちつつ、あえて言語化することにより、虐待を受けながらも関係性を築こうとしつつ今を生きている子ども達へのメッセージとする。

1 虐待を受けた子どものプレイセラピーの意義

本論文では、虐待は関係性の障害であるという視点から、「ポストトラウマティック・プレイ」を可能にする基盤としての「子どもとセラピストとの関係性」に着目する。ギル (1997) や西澤 (1994) のように、トラウマに焦点をあてたアプローチは、D. M. ドノヴァン (2000) らの発達—コンテクスト的アプローチ

とは異なる。本論文では、間主観的な観点から子どもの発達を捉えている鯨岡(1999)の関係発達論¹⁾を基盤にすることにより、「子どもとセラピストとの関係性」に焦点をあてる。なぜならば、虐待は関係性の障害であり、本論文の臨床事例を通して、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の特徴的な側面は、「子どもとセラピストとの関係性」にあると考えるからである。

①「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の定義

プレイセラピーとは心理療法の一種であり、プレイが主たる表現媒体として用いられるものである。プレイセラピーは、子どもの心理療法の諸法のうちで中心的なものである。プレイセラピーは、子ども自身がプレイすることにより自分を表し、自分を知ることができる療法であり、その子どもがプレイすることを手段とする心理療法である。大人の場合、心理臨床に必要な治療関係は、言語を媒介にして治療者と被治療者の間に創りだされる。しかし、子どもの場合には言語発達が不十分なため、言語のかわりに「遊びを介在させて治療関係を作る」ことから、プレイセラピーと呼ばれている。

「虐待を受けた子どものプレイセラピー」とは、虐待のトラウマ性の出来事を再体験しつつ、その時の認知や感情などを解き放ち、そのプロセスを繰り返すことによって、トラウマ性の体験の自己への再統合を促す作業である。

本論文では、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」という療法を「子ども自身がプレイを通して生身の自分に傷つけられたものがあると気づき、子どもがセラピストとの関係性によって変化したという実感をもつための療法である」と定義したい。

②「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の意義

Ann Cattanach(1993)は、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」について、「プレイは、子ども達にとって自分自身の世界を理解するのに大切な道である」と強調している。さらに、「プレイは、子ども達にとっての向心性(centripetal:求心性をもって外から中心に向かう)を引き出すものであり、子ども達は遊ばなければならない」と表現している。

臨床現場での子ども達のプレイは、劇的でドラマティックなものである。プレイルームでは、子どもが本来もっている自然な演技力が発揮される。子ども達は、象徴的な演技を使って、日常の生活とは異なるプ

レイルームの中で、子ども自身が秘めていた世界を表現する。プレイとは、虐待を受けた子どもにとって、具体的な遊びを通じた成長プロセスなのである。子どものプレイは具体的なものから投影的なもの、さらには、ロールプレイへと展開する。このプロセスを通じて子ども達は、象徴や隠喩を発見し、自分の世界を理解していく。

子ども達はプレイを通して、過去のトラウマ体験を単に表現するだけではない。プレイの中でセラピストは、子どもが演技と現実との境界を理解しているのには驚かされる。子どもは、演技と現実の境界をしっかり保ちながら遊ぶ。そのプレイの流れの中では、「このプレイは、もうこれくらいで終わらせたい」という気持ちも子ども側から自然に表現されてくる。大人のセラピーの場合、自己開示をし過ぎて、自らは歯止めがきかなくなることもあり、混乱するケースもある。プレイの不安を軽減する機能は、子どもをその混乱からまもることになる。プレイセラピーでは、子どもの傷つきの危険性がより少なくてすむのである。

虐待を受けた子どもにとって、プレイとはどんな活動であろうか。プレイの意義は、「身体的活動を通じての身体の鍛錬、エネルギー放出による緊張の低減などのカタルシス(鬱積した感情や葛藤を表現によって発散すること)、仲間との適切な社会関係の維持・確立、規則・正否の基準など道徳的活動の学習、自己統制の仕方の習得」など多様である。虐待を受けた子どもにとってプレイは、子ども自身が今おかれている世界の状況を理解するために苦しみを伴いつつ進むものであると同時に、喜びも伴う活動でもある。プレイが本来もっている歓喜をもたらす部分で、子ども達は守られている。さらに、プレイの「不安」を減らす機能は、子ども達のところを守ってくれる大切な基盤のひとつである。

では、「不安」とは、どんなものなのであろうか。「恐れ」と同じものなのか。「不安」と「恐れ」は、ことなる概念である。「恐れ」は、どこからくるか特定できるが、「不安」はその対象を特定できない。子どもは、どこから来るのか分からなかった「不安」をプレイのなかで具体化することによって「恐れ」にするのではないか。子どもは、「不安」の状態にある時、単に動物レベルで「不安」に向き合っているのではなく、人間の情動の深い所で、虐待された「不安」に向き合っているのではないだろうか。この「不安」な状態とは、子どもが生きている生活している場所自体がすでに「不安」という情調で充たされている状態で

ある。言い換えれば、虐待環境に包み込まれているのだ。この「不安」を何らかのすがたのある「恐れ」に変えることを可能にするのがプレイである。

子どものプレイ表現は、言語による自己表現に比べて、より身体活動に結びついている。プレイの中で自由に遊ぶことによって、時にはかなり象徴的なものも表現される。このため、感情のカタルシスや感情の象徴化によって秘められていた子どもの感情が表出されたり、促されたり、展開されたりする。結果として、この自己実現が治療効果を持つことにつながる。

プレイの意義は、虐待を受けた子どもにとっての“自分自身を発見する旅”であり、その子どもが、過去、現在、未来を理解するひとつの方法ともいえよう。

③「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の治療計画

「虐待を受けた子どものプレイセラピー」は、虐待を受けた子どもの回復のための総合的な治療計画の一部である。その中でセラピストの役割は、子どものこのころの回復に寄り添うことである。セラピストの役割は、決して虐待の詳細を見つけ出したり、証拠や情報を得るためにその子どもに圧力をかけたりするものではない。

もし子どもが自分の生命を脅かされたり、生命を守れないほどの危険にさらされていることをセラピーで表現した時には、緊急介入の必要性がある。セラピストは、子どもがこれ以上の虐待を受けないように子どもを守る義務がある。

2 プレイセラピーにおける

「子どもとセラピストとの関係性」

前節のプレイセラピーの基盤には、「子どもとセラピストとの対人関係」がある。本節では、事例（虐待を受けて施設入所している子ども達）を通して、その「子どもとセラピストとの対人関係」の重要性について考察する。

セラピストの子どもへの関係性は、受容的で支持的なものである。他者との間で虐待的な人間関係を繰り返してきた子ども達にとって、これまでとは異なった人間関係を体験することによって、今までの人間関係を見つめて考える機会となる。子どもとセラピスト双方が主体をもった人間関係が、プレイを通して築かれ、「枠」を関係性で築いていくことがセラピーの要素として働くのである。

しかし、子ども達にとって「セラピストとの対人関係」を築くには困難が伴う。なぜなら、虐待を受けた子どもは、これまでの人間関係を繰り返す傾向にあるからだ。子ども達の多くは、セラピストにもこれまでの人間関係で迫ってくる。

あるネグレクトの子どもは、「ボケ」「死ね」「あほんだれ」という暴言をセラピストに長い期間投げかけ続けた。セラピストはその暴言に対して受容的に関わり続けた。子どもはセラピストとの忍耐強い受容的な関係からこれまでの自分に気づき、新しい人間関係を感じるのだ。

E・ギル（1997）は、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」を4つの側面から捉えている。それらは、「セラピストとの対人関係」、「自我プレイ」、「セマティック・プレイ」、「ポストトラウマティック・プレイ」である。

では、従来捉えられている「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の特徴的な側面とは何か。ギルの4つの側面の中で、虐待を受けた子どもに特徴的だとされるのがトラウマとなった体験の具体的、逐語的な再現を特徴とするプレイである。ギルは、トラウマに焦点をあてたアプローチから、「ポストトラウマティック・プレイ」の重要性を指摘している。西澤（1994）も「ポストトラウマティック・プレイ」の重要性を指摘し、セラピストの介入の重要性を示唆している。では、虐待を受けた子どもに特徴的とされる「ポストトラウマティック・プレイ」は、子どものなかでどこころの回復の中に位置づけられているのか。「自我プレイ」と「セマティック・プレイ」を通して考察する。

まず、「自我プレイ」は、自我機能の発達や自我の拡張に応じて生じるものであり、とくに知的に障害を持った子どもや、思春期の新たな自我の認識に意味があるとされる。しかしながら、虐待を受けた子どもにおいても、セマティック・プレイやポストトラウマティック・プレイの後にしばしばこの「自我プレイ」がみられる。ある心理的虐待を受けた子どもは、母親に現実では言えない暴言を吐いた後、トランプゲームをしたり、しりとりをするなどの年齢相応の「自我プレイ」がみられた。このことは、子どもの自我がトラウマからある程度解放されたか、あるいは次なる段階への中継ぎの休憩とも捉えられる。

次に、「セマティック・プレイ」とは、テーマを象徴的に表現したプレイであり、象徴を含むさまざまなテーマを中心に展開するプレイのことである。「象徴

遊び」とも表現される。「ポストトラウマティック・プレイ」との違いは、防衛機制によって加工されたものになることが多いところである。これは、虐待によって曲げられた自己イメージや他者イメージや両者の関係性でもある。あるネグレクトの子どもは、プレイのはじまりでは、ほとんど育ててもらっていない母親を現実には存在しない理想の母親として演技した。また、ある心理的虐待を受けた子どもは、実際にはもういない父親をテーマに数ヶ月にわたって箱庭をつくった。その子どもは、ある時は父親を自動車事故で入院させ、またある時は、雪の道で父親の運転する車をスリップさせた。彼女は、父親を何度も災難に合わせた後、家庭に戻した。子ども達は、実際には経験していないことを、虐待によって影響された対象イメージとして表現していたのだ。

最後に、「ポストトラウマティック・プレイ」とは、トラウマとなった体験の具体的、逐語的な再現を特徴とするプレイである。具体的には、子どもが人形を使って、自分が受けた虐待の再現をプレイすること等があげられる。ある心理的虐待を受けた子どもは、家事を娘に切り盛りさせる母親、「疲れた」と一日中言っている母親をおまごとの中で2年間にわたって演じ続けた。このプレイは子どもにとってどんな意味があるのだろうか。実際に過去に体験したことではあるが、その時とは違い、子ども自身がその体験を能動的にプレイのなかで表現しているのだ。その時の自分をどこかから客観的にながめているとも捉えられる。

前述のようにギル(1997)は、この4つのプレイセラピーの側面の中で、特に虐待を受けた子どもに特徴的であり、大切な側面であるのが「ポストトラウマティック・プレイ」と指摘している。このプレイは、表現されたトラウマに何とか対処しようとしている子どもの心理の表れである。トラウマを再現することが子どもの回復につながる場合もあるし、あるいは無力感や恐怖感を強め、トラウマを固定化してしまう場合もある。ギル(1991)は、無力感や恐怖感をセラピーを通して修正できると指摘している。一方、くりかえしの「ポストトラウマティック・プレイ」がさらなる無力感や恐怖感を固定化する危険性も Chethik(1989)によって指摘されている。

L. Terr は、トラウマ治療のプロセスを、再体験(Re-experience)、解放(Release)、再統合(Reintegration)という「三つのR」で表している。このプロセスの最初のRにあたるのが、虐待を受けた子どもの場合、

「ポストトラウマティック・プレイ」である。

「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の場合、再体験後の解放と再統合にあたってセラピストの治療的介入が特に必要となる。「虐待を受けた子どものプレイセラピー」では、こうした危険性に対して、セラピストの治療的介入が求められることが特徴的であるといえる。セラピストの治療的介入を考える時、その基盤に「子どもとセラピストとの対人関係」が存在する。他の3つの側面は、むしろ「子どもとセラピストとの関係性」に基盤を置くものであり、本論文では「子どもとセラピストとの関係性」の上に積み上げられた3つのプレイであると捉える。

では、「ポストトラウマティック・プレイ」が子どもにさらなる無力感や恐怖感を固定化する危険性を回避するには、セラピストはどのように子どもと関わればよいのか。鯨岡(1999)の関係発達論を引用すれば、「表現されたトラウマに何とか対処しようとしている子どもの心を理解するには、周りの人がどんな思いでその子に関わっているかという関係性に注目することが原点である」と捉えられよう。「子どもとセラピストとの関係性」に焦点をおき、双方の関係性を時間軸を考慮して育てていくことによって育むことであろう。このことをプレイセラピーの「枠組み」づくりにセラピストと子どもの双方が関わるということとして捉えたのが本論文の構想である。

本論文では、虐待を受けた子どもに虐待のトラウマ治療を可能にするセラピーの基盤として「子どもとセラピストとの関係性」をおく。さらに「子どもとセラピストとの関係性」そのものが時間軸の中で変化していくものであるという視点に着目し、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」において、特殊な「枠組み」を構築する。

3 「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の「枠組み」の再構築

——虐待を受けた子どもの「枠組み」づくりへの関与、事例を通して——

本節では施設入所をしている「虐待を受けた子どものプレイセラピー」について、その「枠組み」の特殊性について考察する。これまでの精神医学や臨床心理学の「枠組み」を「虐待を受けた子どものプレイセラピー」においてそのまま当てはめることは、問題点があることを指摘する。そして子ども自身が、セラピーの「枠組み」づくりへの関与することの意味の考察を

通して、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の「枠組み」を再構築する。

臨床心理学は、精神医学の精神分析に源を持ち、両者は密接に関係している。そして、精神分析と同様、臨床心理学でも、フロイト以来、セラピーの「枠」は守られている。各セラピーの時間制限は、50～60分である。セラピーの場は、「自由で保護された空間」として機能し、ここで話された内容は、セラピストとクライアントの間みみの秘密とされてきた。それゆえ、クライアントは、こころの深いところまで表現することができ、表現することへの抵抗を取り除くことが出来るとされてきた。しかしながら、これは「外枠」である。「外枠」は、クライアントのあり方によって、変化し得るものだと考える。なぜならば、治療構造は、両者の関係性のあり方で決まってくるものだからだ。しかも、この「外枠」とは、従来、精神医学の領域にあるものである。これが医学である限り、生物学的医学モデルの領域にある。しかし、臨床心理学は医学ではない。ここに「枠」を新たに思索する理由と意味があると考えられる。

治療構造は、両者の関係性のあり方で決まってくるものであるとすれば、ここで取り上げる事例のクライアントは、虐待を受けて施設入所をしている子ども達である。ここで、子ども達のセラピーを受ける時の置かれている状況について考えてみる。

虐待を受けて施設入所をしている子どもにとって、施設は「家」ではある。しかし、本来の「家」ではない。本来生まれ育った「家」ではないが、生活の場所であり「家」である。子どもの中で「家」という「枠」が、一般家庭の子ども達のそれとは異なる。それ故、本ケースでは、セラピストは、子どもが育つところの部分（生活臨床）と、トラウマケア（心理臨床）の双方を考慮しなくてはならない。

では、生活臨床と心理臨床の双方を考慮するということは、何を意味するのか。子どもを理解するうえで、生活面と心理面の双方に関わるということである。それは、従来のセラピーの「枠」は充分ではない、ということも同時に意味している。

虐待を受けた子ども達は、人間の関係性の「枠」づくりに自らが関与できることに気づかずにいると考える。それ故、子どもが自分自身で「枠」を探り、「枠」があることを感じ、「枠」を創造していくことが、人間の関係性を築いていくスタートであると考えられる。この探りあいの関係こそが、最初の人間の関係性である

と考えるからだ。関係性を探りつつ、親も子どもも主体があり、お互いに相手の情動を感じるのに少し待つことのできる親子関係は、「枠」の探りあいを許す最初の場であり時間であると示唆される。

「虐待を受けた子どものプレイセラピー」をその「枠組み」を明確にせずにおこなうこと（具体的には、時間、空間、連携のあり方）は、セラピストは既存の心理臨床の「枠組み」の中では守られないことを意味する。セラピストは、変化し得る「枠」の中でエネルギーを費やし、ある時は、その関係に巻き込まれるかもしれない。しかし、その巻き込まれること（二次的外傷性ストレス反応）こそに関係性を築くヒントがあり、「枠」づくりを通して関係性を築いていくことになる。従来のセラピーの「枠」ではない、子ども自らが関与するセラピーの「枠」が必要になると考える。

子ども達がプレイセラピーを通して、どのように「枠」づくりに関わっていくのかを、「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の形態を述べた後、具体的な事例で検討する。

本事例のプレイセラピーの形態については、心理臨床の現場から従来の「枠組み」を超えているとの指摘がある。心理臨床の本来の「枠組み」では、子どもと過ごす空間はプレイルームに限定されているし、時間は守られなくてはならないからだ。しかし、本ケースの「虐待を受けた子どものプレイセラピー」では、この「枠組み」を超えていくことにこそ意味がある。子ども達は、「セラピストとの関係性」のなかで、従来の「枠組み」を超え、「枠組み」自体に関与していくのである。

① 「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の形態と構造

本論文のプレイセラピーの対象は、虐待を受け児童相談所により施設入所の緊急介入が必要とされた子ども達である。一週間に一度、60分のプレイセラピーの中で子どもと時間と空間を共有する。通常のプレイセラピーのケースは、子どもがプレイルームに保護者と現れ、終了後、待っている保護者と家に帰る。ところが、虐待を受け施設に入所している子ども達の場合、保護者の代替者は施設職員であり、帰るべき「イエ」は施設である。入所施設を「家」という捉え方をしている子ども達は、どのくらいいるだろうか？「家」のイメージは、乳児院から引き続き施設入所の子どもと途中で施設の子どもとなった児童とは異なる

る面もあろう。

本事例では、施設の職員がプレイルームまで子どもを連れてきて、セラピストが施設まで送り届けるという形をとっている。通常のプレイセラピーは、プレイルームの中だけにセラピストと子どもの関係性は限られている。児童相談所におけるプレイセラピーの場合は、子どもを施設職員が連れてきて、一緒に帰るといった形態をとっている。送り迎えの時間も含めて施設職員の時間は大変割かれるが、多くの場合、職員を独り占めできることもあって子ども達には好評である。

各プレイセラピー毎に「子どもとセラピストの関係性」をエピソード記述し、スーパーヴィジョンを受ける。セラピストは、スーパーヴィジョンによって子どもへの理解を深めるだけでなく、セラピスト自身が不安や二次的トラウマから守られ、自己理解や自己洞察が深まり、セラピスト自身の成長が促される。その上で、三ヶ月に一度、スーパーバイザー、施設職員、各セラピストで事例研究会を持つ。事例研究会でセラピストは、それぞれの子どものプレイセラピーでの様子を報告し、施設職員から、家族、学校、生活の様子などの報告を受ける。当面の課題について話し合い、種々の角度や視点からケースを分析し、より望ましい取り組みを検討する。本ケースでは、プレイセラピーも事例研究会も、施設とは異なった場所でおこなわれる。

プレイセラピーを受けている子ども達は、スーパーバイザーと施設の処遇会議によって、プレイセラピーの必要性を認められた子ども達である。セラピストは、ケースカンファで、子どものプレイの意味をより深く理解することも多い。虐待を受けた子どもの場合、家族歴や生育歴を知らないで見立てをすることは、非常に困難である。それぞれの子どもの家族歴は、少しずつプレイの中で明らかになっていくものもある。しかし、プレイの背景には地域性や何世代にも渡る歴史ともいべきものがあり、子どもだけの関わりでは、その全体像は到底分からない。どれだけ連携して情報を集められるかということも、子どもを理解するのに大切な要素になってくる。

本事例のプレイルームは、施設から徒歩圏内にあるが、施設とは別空間にある。子ども達の入所施設にも臨床心理のプレイルームがある。施設内におけるプレイセラピーは、入所児すべてが対象であり、プレイルームも同じ敷地内にある。そのプレイルームは、日常生活の中で通る部屋であり、誰もが予約があれば出入りすることの出来る部屋である。部屋の前を通るたび

に、自分が表現したものを思い出す可能性もある。誰かに知られるのでは、という子ども自身の恐れもある。反面、施設内のプレイルーム環境は、心身両面で子どもの身近に存在し、求めたい時にはそこにあるという側面がある。子どもがプレイの中で出してくるものは、別空間のプレイルームで表現してくるものとは異なってくる。施設内のプレイセラピーでは、より現実の生活臨床的なものが表現され、また具体的なものが言語で語られる傾向にある。このことから、子どもが育つところの部分（生活臨床）は、施設内のプレイセラピーで、トラウマケア（心理臨床）の部分は、別空間にある本プレイセラピーでなされていると捉えている。

施設入所の虐待を受けた子どもの場合、「ポストトラウマティック・プレイ」の必要性は明らかである。その意味でもトラウマケアの観点から、非日常的な時間と空間の確保は重要であり、虐待を受けた子どもの場合は、セラピー空間が子どもの日常と離れていることが、大きな意味をもっている。

ある施設入所児は、「畳一畳でいいから、自分の場所がほしい」と言った。自分自身の空間を得ることが難しいのだ。ある子どもは、プレイの中で、畳一畳程のスペースをゴザと椅子で囲んで作った。その後はじめて、彼女はその囲いの中の家族ごっこ遊びで、実母への反抗的な態度を演じることができた。彼女は、一年以上にわたる人形遊びの中で、母親に逆らったことはない。その彼女が、プレイの中で「そんなん言うんだったら、自分でご飯作ってよ」と激しい口調でご飯を作らない母親に迫った。現実には、彼女は母の病を知っていて、決して母を責めることはしない。それどころか、母を気遣い助けている。その彼女が、プレイルームという守られた「枠」の中で、さらに自分を守る「枠」を創ってから、こころが言いたいことを演じた。この彼女の行為は、「枠」を子ども自身が試行錯誤してつくることをセラピストに提示し、「子どもとセラピストとの関係性」の中で、「枠」を考慮し、「枠」を再構築する糸口となった。

②プレイセラピー時間の「枠」

通常のプレイセラピーの時間の「枠」は50分から60分である。これには、セラピストが集中できる時間が50分から60分であることが背景にある。

時間の「枠」についてA（心理的虐待で、施設入所の女児、3年間継続）は、最初の半年、数分も違わないように守り通した。その後、試行錯誤をしつつ彼

女なりの時間の「枠」を創っていった。Aは、入所当時、施設での居場所を確保するのに懸命であった。セラピーの開始時は、自分から「あっ、もう時間」と時間を気にし、いい子に撒し、こちら側の「枠」を探り時間を守ろうとした。しかし、関係性ができてくるにしたがい、その時間の「枠」を「遅れてきたから時間延ばしてもいいよね」とセラピストの目を覗き込み時間を延ばそうとした。

この行動を自分の存在感を確かめるために無意識に行った手段だと解釈してみる。すると、Aは、その背景にある感情を理解して欲しかったのだろう。セラピストは沈黙して、時間を厳守することよりAの感情に寄り添うようにこころがけた。その結果、Aはこれを数回繰り返すうちに、自分で時間の「枠」を決めていった。セラピスト側が押し付けた「枠」ではなく、自分自身が決めた「枠」をある時はAが自分で越え、またある時は、与えられ決められた「枠」をAが外すことで探った「枠」である。これは、セラピストとAとの関係性の中で創り上げられた「枠」である。そのセラピストとAとが探り合った時間の「枠」づくりこそが、最初の基本的な関係性であった。最近のAは、うそをついてまで時間をのばそうということはなく、「あー、まったく一時間って、すぐなんだから」とあきらめたような顔で同意を求めつつ笑っている。そして時には、「帰りたくない」とつぶやけるようにもなった。彼女は、セラピストにいろいろな行動を出しながら、SOSを出す。セラピストは、その行動を二人の関係性で捉え続ける。そしてその度に、彼女は人間の関係性の新たな側面に気づいていくと感ぜられる。

③プレイセラピー空間の「枠」

通常、セラピーは、プレイルームの中だけでおこなわれる。プレイルームを一步出れば、空間も「枠」の外である。プレイの空間（場所）は、それ自体が仮想された空間であり、また同時に、別の世界への入り口としても機能している。

一年を経過したころ、Aは、プレイルームの中では、セラピストに赤ちゃんのように抱っこやおんぶをせがんだ。J・ルーシュは、「ことばによる符号は、知的な訴えをもち、ことばによらない符号は情緒的な訴えをもつ」と表現している。

この情緒的な訴えが出てしばらくして、セラピストは「おんぶして帰ろうか？」とAを誘った。プレイルームという空間の「枠」を故意にはずしてみたの

だ。Aは、「それは、部屋の中だけでしょうが」と、「何を言ってるのよ、二人だけの世界のことなのに」と言わんばかりに口をとがらせた。

その後、Aはプレイルームの中でセラピストにおんぶをせがみ続けた。次第に「おんぶは、部屋の中だけ」と言い切っていたAが、プレイルームのある建物の入り口までおんぶされることをのぼし出した。毎回Aは、「ここでおんぶは終わり」とばかりに玄関でセラピストの背中からポンと飛び降りた。手をつないで施設まで歩き、次週の確認をすると「またね」と現在の家に吸い込まれていく。そして、2年半が経過したある日、彼女はおんぶを卒業した。

これは、A自身が試行錯誤する中で、セラピストと自身との関係性でさぐり作った空間の「枠」である。A自身が関係性において探った「枠」でこそ、「枠」そのものに意味が生まれると考える。

④「枠」に気づくこと、「枠」に関与すること

虐待を受けた子どもは、関係性によって創造することのできる「枠」があることに気づくことで、関係性づくりのスタートラインに立つと考える。子ども達は、「枠」づくりに参加することでセラピストとの関係性をはぐくんでいくことができる予感を自分のものにする。虐待を受けた子どもは、これまでの虐待の断えない環境のなかで、はじめから与えられた「枠」に疲弊し、自分が他者との関係性によって「枠」を創造する機会を持てずにいたと示唆される。

Aは、施設入所直後、ほとんど自己主張が出来ずに、動くことのない硬い「枠」をもっていた。Aは、2年を経て、「私は、ものじゃない」とはじめて施設で自分の気持ちを言語化した。このことを、職員は、「Aちゃん、よく自分の気持ちが言えたね」と肯定した。Aは、「枠」づくりに自らが関与したのだ。

虐待を受けた子どもは、この自らが関係できる「枠組み」の中で、子ども自身が「枠」を越え、「枠」を外し、「枠」を創造できることで、セラピストとの基本的な関係性を築いていくのである。「子どもとセラピストとの対人関係」でつくった「枠」である。

上記の理由から、本ケースでは虐待を受け施設入所を余儀なくされている子ども達の基本的な関係性づくりに、従来のプレイセラピーの「枠組み」と違う「枠組み」をもってあたる。そして、子どもとセラピストの双方が主体を持っていることを感じあい、その探り合う関係性こそが、人間の関係性を育てる基本であると考える。

おわりに

白石 (1988) は、「こどもの虐待のケースを考えると、その環境自体に子どもが虐待されているのであるが故に、ケースワークははずせないことは明確であり、問題行動があるのは必然であるが故に、カウンセリングもはずせない。また、その状態が幼い時に受けたトラウマであればあるほど、無意識からきているものであり、心理療法も必要であるということは、明確だ。大人のケースは、あるいは心理療法ひとつだけで解決能力がある場合はパーソナリティーの変容や行動変容にいたることが可能かもしれない、しかし、こどもの虐待のケースはこの範疇ではない」と治療計画にプレイセラピーが必要であることを提起している。本論文では、この「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の必要性とその意義を論じた。さらに、事例を通して時間的経過を考慮しつつ、「子どもセラピストの関係性」のなかで、子ども自身がプレイセラピーの「枠組み」づくりに関与することの意味を考察した。

以上述べてきたことは、本来の心理臨床におけるプレイセラピーの「枠組み」(治療構造)を「子どもとセラピストの関係性」によって変えていくことによって、新たな「枠組み」(治療構造)を構築していくというパラドキシカルなものである。

「虐待を受けた子どものプレイセラピー」の目的は、信頼感、安心感のもとで、人間の関係性に自分自身が関与できることをまず気づかせることである。その「枠」に気づくまで、子どもは上記に述べたプレイセラピー(心理臨床)の新しい「枠」で守られるのである。なぜなら、虐待を受けた子ども達は、生活臨床と心理臨床の双方を考慮しつつ育てられる必要があるからである。

一方、セラピストは、これまでの心理臨床の「枠」を超えて、既にある親子関係や生活の場である施設との関係にも巻き込まれる。その巻き込まれることこそが関係性の基盤であり、セラピストと子どもとで「枠」を認識しあうことになる。子どもは、セラピストとの「枠」づくりの過程を通して、自分が他者とも関係性を築いていけるという自らの力を感じ、自分の力を引き出していくのだ。まさに子どもとセラピストは“育つ—育てられる”という関係の生命サイクル過程の中で、共に成長していくのである。

プレイセラピーは、虐待環境に生活してきた子どもに、信頼関係は築いていけるものである、ということを経験させていく糸口になる。さらに将来、子ども自身が、施設という生活の場にそのセラピストとの関係性をもちかえり、般化していくことが望まれる。

注

1) 子どもの関係発達論

鯨岡 (1999) は、子どもを行動科学の枠組みの下で、個体能力発達に焦点化する限り、「こどもが発達する」ということの問題性を全体として捉え損ねてしまうことを現象学の視点から指摘している。そして、従来の個体能力の発達から関係としての発達への視点の変換を図ろうとしている。鯨岡 (1998, 1999) は、関係そのものが時間軸の中で変化していくものであるし、関係は子どものこころの問題であるとし、関係発達臨床論を提唱している。こころは、周りの人にどう思われるかで左右されるものである。さらに、子どものこころは、その子どものものであるが、周りの人のこころが入り込んでその子のこころになっている。したがって、周りの人がどんな思いでその子に関わっているかという関係にこころが向けられるのである。ここに、関係発達論の原点がある。

引用文献

- (1) 寺見陽子「こころを育てる人間関係」保育出版社 2001
- (2) 白石大介「対人援助技術の実際」創元社 1988

参考文献

- ・ Ann Cattanach, "Play therapy with Abused Children" Jessica Kingsley Publishers 1993
- ・ M. Chetnik, "Techniques of Child Therapy: Psychodynamic Strategies" Guilford Press 1989 (2nd ed. 2000)
- ・ D. M. ドノヴァン・D. マッキンタイア「トラウマをかかえた子ども達」西澤 哲訳 誠信書房 2000
- ・ E. Gil, "The Healing Power of Play: Working with Abused Children" Guilford Press 1991
- ・ エレナ・ギル「虐待を受けた子どものプレイセラピー」西澤 哲訳 誠信書房 1997
- ・ ジュディス・L. ハーマン(中井久夫訳)「心的外傷と回復」みすず書房 1996
- ・ 鯨岡 峻「両義性の発達心理学」ミネルバ書房 1998
- ・ 鯨岡 峻「関係発達論の構築」ミネルヴァ書房 1999
- ・ 鯨岡 峻「関係発達論の展開」ミネルバ書房 1999
- ・ 西澤 哲「子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ」誠信書房 1994
- ・ 西澤 哲「トラウマの臨床心理学」金剛出版 1999
- ・ R. H. スタム「二次的外傷性ストレス」誠信書房 2003
- ・ 斎藤 学「封印された叫び」講談社 1999